ルドヴィカ・イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の書き込みを巡って
―― ジェーン・スターリングの果たした役割 ――
About Annotations in the Musical Scores of Ludwika Jędrzejewiczowa:
The Role Played by Jane Stirling

加藤　一郎
KATO Ichiro

本研究はフリデリク・ショパンの姉ルドヴィカ・イェンジェイエヴィチョーヴァが所有していた楽譜に見られる書き込みについて検討したものである。この楽譜はショパンの作品の初版およびその後の版からなり、彼の死後、イェンジェイエヴィチョーヴァが３巻本に纏めた。その楽譜は1936年に彼女のひ孫娘ルトヴィカ・チェホムスカからフリデリク・ショパン協会に売却され、それ以降フリデリク・ショパン博物館に所蔵されている。近年の研究によればこの楽譜の書き込みの多くは弟子のジェーン・スターリングが行ったものであり、ショパンがスターリングの楽譜に行った書き込みを彼女がイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写したものと推察されている。そこで、本研究ではスターリングの筆跡の特徴、彼女のショパン理解の度合い、彼女の証言等を基に、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の書き込みについて考察を深め、スターリングが果たしたであろう役割について検討した。

Keywords: Fryderyk Chopin, musical scores, annotations, Ludwika Jędrzejewiczowa, Jane Stirling

序

フリデリク・フランチシェク・ショパン Fryderyk Franciszek Chopin（1810～1849）は弟子達の楽譜に多くの注釈を書き込んでおり、その内容は幾つかの先行研究で明らかにされてきている。しかし、ショパンの姉ルドヴィカ・イェンジェイエヴィチョーヴァ Ludwika Jędrzejewiczowa（1807～1855）が所有していた楽譜コレクションについてはその伝承過程も含め、不明な点が多い。イェンジェイエヴィチョーヴァはショパンのレッスンを受けていたわけではないし、その楽譜コレクションには複数の異なった筆跡による書き込みが見られるからである。近年の研究によれば、それらの書き込みの多くは弟子のジェーン・W・スターリング Jane W. Stirling（1804～1859）[(1)]が行ったものであり、ショパンがスターリングの楽譜に行った書き込みを彼女がイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写したものと推察されている。そこで、本研究は主要な先行研究を参考にしつつ、スターリングの筆跡の特徴、彼女のショパン理解の度合い、彼女の証言等を基にこの楽譜コレクションの書き込みについて考察を深め、スターリングが果たしたであろう役割について検討する。本研究では、フリデリク・ショパン博物館（以下「MC」と記す）のアーカイヴからイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜をダウンロードして資料として用いる[(2)]。

1．イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の伝承過程

本研究では、先ずクリスチナ・コビランスカ Krystyna Kobylańska（1925～2009）の『フレデリック・ショパン：テーマ別書誌目録』*Frédéric Chopin: Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis*（1979）、MC のアーカイヴの当該資料の書誌情報、ジャン・ジャック・エーゲルディンゲル Jean-Jacques Eigeldinger（1940～）の『弟子から見たショパン：増補改訂版』*Chopin vu par ses élèves; 3e éd, revue et augmentée*（2020）を参考にし、この楽譜の伝承過程について整理する。

1. 1. コビランスカの『フレデリック・ショパン：テーマ別書誌目録』

この楽譜に関する初期の研究はコビランスカの『フレデリック・ショパン：テーマ別書誌目録』の中に見られる（Kobylańska 1979: XⅣ）。該当部分には下記のように記されている。

> ショパンの姉ルドヴィカ・イェンジェイエヴィチョーヴァは、彼のフランス初版の楽譜をハーフレザーで綴じた３巻からなる本（Ｃのイニシャルが付いている）を所有していた。この３巻本には次の内容が含まれている：
>
> 第１巻：144枚
> 　　作品１～３、６～11、25
>
> 第２巻：173枚
> 　　作品12～18、21～24、26～27、29～30、32～34
>
> 第３巻：147枚
> 　　作品28、38～52、54（43＝誤植）
>
> 　全ての書き込みはショパンによるものではない；幾つかの書き込みは確実に不詳な者の手によるものであり、詳細な筆跡学的調査をまだ受けていない。―これらの楽譜はおそらく元々ショパンの「自家用の楽譜」であり、その後、最初は彼の姉ルドヴィカ（第１巻の２枚目に‘Louise Jędrzejewicz’の署名が含まれている）、次に彼女の娘ルドヴィカ・チェホムスカの所有物であった。彼女の孫娘ルドヴィカ・チェホムスカ［同じ名前］は 1936 年にこの３巻本をショパン協会に売却し、現在、その博物館に所蔵されている（所蔵番号：M/174-176）。

この記述から、イェンジェイエヴィチョーヴァはショパンの作品のフランス初版およびその再版の楽譜をハーフレザーで綴じた３巻からなる楽譜コレクションを持っていたこと。その内容は作品1～54までの作品をほぼ網羅するものであり、当初は恐らくショパンが所有していたこと。そして、その楽譜にはショパンによる書き込みと共に、それ以外の者による書き込みがあり、詳細な筆跡学的調査をまだ受けていないこと。その楽譜はイェンジェイエヴィチョーヴァの娘ルドヴィカ・チェホムスカの手を経て、チェホムスカの孫娘である同名のルトヴィカ・チェホムスカに受け継がれた。チェホムスカはこの楽譜を1936年にショパン協会に売却し、調査当時、それはフリデリク・ショパン博物館に所蔵されていたことが記されている。この時点で、書き込みが誰によって行われたかは分かっていない。

1. 2. MC の書誌情報

そこで、MC の当該資料を見ると、この資料の書誌情報が巻毎に記載されている。第１巻の書誌情報は下記の通りである。

識別

タイトル

　タイトル　第１巻、フリデリク・ショパンの作品の　　フランス初版とその再版を集めたもの。

言語　ポーランド語

タイプ　説明的なタイトル

概要　フリデリク・ショパンの作品のフランス初版とその再版を集めて製本したもの。手書きの注釈付き。第１巻、個別の版：［1833～1845］、フリデリク・ショパンの手による注釈：［1833年以降、1849年以前］、オリジナルの装丁：［1850年以降？］、不詳な者の手によるメモ：［1849～1850年？］、第二次装丁：1967年。かつてはフリデリク・ショパンが所有し［？］、その後、彼の姉のルドヴィカ・イェンジェジェヴィチョーヴァが所有していた。

他の番号　D/496 [NIFC]

部分

資料番号　M/174

資料タイプ　楽譜
初版

説明

内容（説明）

この巻には作品１、２、３、6－1～５、7－1～４、８、9－1～３、10－1～12、25－1～12、11の楽譜が含まれている。表紙の裏側の右下隅にはオリジナルの装丁の断片が貼り付けられており、茶色の大理石模様の背景に装飾的な‘C’のイニシャルが金字で刻まれている。［ロンド作品１の］第２ページには‘Louise Jędrzejewicz’のサインがある。

内容（言語）　フランス語

内容（その他）　［曲目一覧につき省略］

内容（註）：

各巻内の手書きの注釈は、現在パリのフランス国立図書館に所蔵されているジェーン・ウィルヘルミナ・スターリングのコレクションに含まれる注釈に類似している。J. J. エーゲルディンゲルによると、J. スターリングは、自分の楽譜コレクションに書き込まれたフリデリク・ショパンの注釈をルドヴィカ・イェンジェヴィチョーヴァの楽譜コレクションの様々な場所に演奏のガイドラインとして書き込んだ。

大きさ

高さ（表紙）：338 mm
幅（表紙）：271 mm
厚さ（背）：34 mm
高さ（紙面）：331 mm
幅（紙面）：257 mm
厚さ（紙面）：25 mm

大きさの註　表紙の高さ：335～338㎜

材料

紙
印刷用インク
インク
黒鉛（鉱物）
厚紙
革
金（素材）

物理的説明

144枚。個々の出版号内にオリジナルのページ番号が印刷されており、右側のページの右上隅に鉛筆でページ番号が付けられている。第二次製本。独自のマーク：第１ページに鉛筆で目録番号 M/174 が書かれ、‘MUZEUM * WARSZAWA’と縁どられた黒く丸いスタンプが押されている。フィールド：‘TIFC［フリデリク・ショパン協会］’、第２ページと第144ページに同様のスタンプが二次的に押されている。

作成[3]

人

人　ショパン，フリデリク・フランチシェク
役割　作曲者
人　イェンジェイエヴィチョーヴァ，ルドヴィカ
役割　最初の管理者
人　不詳の者[4]
役割　追記者

技術

技術　彫版（印刷過程）

技術　手書き
技術　製本
技術　塗金

歴史と関連

関連項目［マイクロフィルム等］
F-Pn/241Musique/Rés. Vma 241 I-VII
F/673
F/677
F/678
F/680

資料の歴史

この資料はフリデリク・ショパンの家族のコレクションに由来する。1936年にアントニ・チェホムスカの娘で、ルドヴィカ・イェンジェイエヴィチョーヴァのひ孫娘であるルドヴィカ・チェホムスカからフリデリク・ショパン研究所が購入した。フリデリク・ショパン研究所は第二次世界大戦後、フリデリク・ショパン協会と改称された[(5)]。フリデリク・ショパン協会は2005年から、国立フリデリク・ショパン研究所に委託している。

参考文献

参考文献（管理された）

ショパンの作品の手稿譜。カタログ vol. I～II（ショパンのドキュメント；２）
詳細情報　第40ページ

参考文献（管理された）

ヴルブレフスカ・ハンナ・ゲンダシェク＝レウコヴィッチ・マリア。所蔵目録。博物館。原稿、印刷物、図版、写真。ワルシャワ：フリデリク・ショパン協会、1971 年。XVI ＋296ページ
詳細情報　第133～140ページ
目録番号　255

参考文献（管理された）

ショパン・コレクション =Les fonds Chopin：展覧会カタログ／［台本、紹介および展覧会カタログ、ハンナ・ヴルブレフスカ＝ストラウス著；フランス語への翻訳、マリア・ミカリク；グラフ、カタログとアートプロジェクト、タデウシュ・コビウカ］。ワルシャワ：フリデリク・ショパン協会、1985 年。132 ページ：ファクシミリ、写真、肖像画、図面。21センチメートル。
詳細情報　第19ページ

参考文献（管理された）

エーゲルディンゲル、ジャン＝ジャック。弟子から見たショパン / ジャン＝ジャック・エーゲルディンゲル著；ズビグニェフ・スコヴロン翻訳。クラクフ：ムジカ・イアゲロニカ、2000年。（ワルシャワ大学音楽学研究所研究及び学術論文 シリーズ C Vol. ３）。403、第［１］ページ、第［48］ページの表；25センチメートル。ISBN 83-7099-094-0。
詳細情報　第265～272ページ

参考文献（管理された）

エキエル、ヤン。フリデリク・ショパン作品のナショナル版への序文。第１巻：編集上の問題。クラクフ、ポーランド国営出版局、1974 年、202 ページ。表16中表１
詳細情報　第107ページ

追加目録

第二次装丁

側面の部分　M/174

識別

タイトル

タイトル	第二次装丁
言語	ポーランド語
タイプ	タイトル
概要	現代の装丁、1967 年。表 5 枚、裏５枚の保存カード

解説

内容　装丁はハーフレザーで行われており、背の上部に‘CHOPN’［ママ］の文字がエンボス加

工され、塗金が施されている。表紙の裏側の右下隅に元の装丁の断片が貼り付けられており、茶色の大理石模様の背景に装飾的な金色の‘C.’のイニシャルがある。

大きさ

高さ（表紙）：335 mm
幅（表紙）：267 mm
厚さ（背）：38 mm

素材

繊維製品
厚紙
革
金（素材）

作成

日付け

日付け　1967
役割　　実行日／制作日

技術

技術　製本（過程）
技術　塗金

［以下、曲目一覧につき省略］

MCの書誌情報は巻によって記載内容が若干異なっているが、基本的な伝承過程については一致しており、それはコビランスカの研究とも矛盾するものではない。しかし、MCの書誌情報では、不詳な者の手によるメモが行われた時期が1849～1850年［？］となっている。そして、不詳な者の手による書き込みはスターリングの楽譜コレクションに含まれる注釈と類似していることに触れた上で、「スターリングは、自分の楽譜コレクションに書き込まれたフリデリク・ショパンの注釈をルドヴィカ・イェンジェヴィチョーヴァの楽譜コレクションの様々な場所に演奏のガイドラインとして書き込んだ。」というエーゲルディンゲルの見解が引用されている。この部分はコビランスカの研究以降に新たに分かってきたことと考えられる。そこで、MCの書誌情報の参考文献にも挙げられているエーゲルディンゲルの研究を見ていくことにする。

1. 3. エーゲルディンゲルの研究

エーゲルディンゲルは『弟子から見たショパン』の付録Ⅱ「イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜」（邦訳 pp. 333～341）で、この楽譜の書き込みに関する見解を述べている。エーゲルディンゲルは先ず、この楽譜の由来と概要、曲目に触れた後、この楽譜に書き込まれた注釈の多くはスターリングの楽譜に書き込まれた注釈と同じ内容であることを指摘した上で、この２人の楽譜が「接触を持った」可能性に触れている。

エーゲルディンゲルがその際に着目したのは、書き込みの筆跡である。彼は書き込みには「はしり書き」で行われているものと「しっかりと丁寧に書かれた」ものがあり、前者はショパンが行ったものとし、後者はスターリングが行ったものと推察している。エーゲルディンゲルは、ショパンがスターリングのレッスンの際に彼女の楽譜に書き込んだ注釈を彼女がイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写したものと述べている。スターリングはショパンが亡くなる前に彼の書き込みのある自分の楽譜を７巻本に纏め、各巻にインチピットまで付けて整理していたことから[(6)]、彼女がショパンの書き込みをイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写し、それを後世に残そうとしていたことは充分に考えられる。

スターリングがこの転写を何時行ったかについては複数の可能性がある。イェンジェイエヴィチョーヴァは1844年７月から同年９月初旬までと、ショパンが亡くなる前の1849年８月８日から1850年１月２日までの２度に亘ってワルシャワからパリを訪れていることから、先ず、彼女が初めのパリ訪問の際にこの楽譜をワルシャワに持ち帰った可能性がある。それは、このコレクションに当時まだ出版されていなかった作品55～65が欠けていることとも符合する。しかし、エーゲルディンゲルは、スターリングはその時まだショパンの弟子になったばかりであり、自分の先生の楽譜に書き込みができる状況ではなかったこと等を挙げ、この考えを否定している。そ

して、イェンジェイエヴィチョーヴァはスターリングと親しかったことから、ショパンが1849年10月17日に亡くなった後、彼女がパリを発つまでの間に互いの楽譜を照合し、スターリングによって転写が行われたとする考え方を示している。これは、MC が書き込みの時期を「1849～1850［？］」としていることと符合する[7]。そこで、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜を調査し、この問題を検討することにする。

2．イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜

写真１　‘C.’のイニシャル

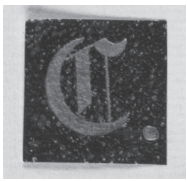
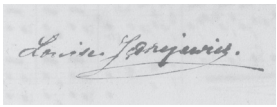


写真２　‘Louise Jędrzejewicz’の署名



イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜コレクションは元々作品番号毎に出版されたショパンの作品のフランス初版とその再版本の個々の楽譜からなるが、それらはイェンジェイエヴィチョーヴァによって1850年以降に３巻本に纏められ、その際、最初の装丁が行われた。その後、1967年にフリデリク・ショパン協会によって２度目の装丁が行われ、現在の姿になった。２度目の装丁の際、各巻の背の上部に‘CHOPIN’の文字がエンボス加工で記され、そこに塗金が施されている。表紙の裏側の右下隅には、初めの装丁の断片が貼り付けられており、そこには茶色の大理石模様の背景の中に装飾的な‘C.’のイニシャルが金色で記されている（写真１）。このＣの字は最初の装丁では表紙の中央にあったものである。また、第１巻の作品１のタイトルページの次の白紙には、下の方にペン書きによる‘Louise Jędrzejewicz’の署名がある（写真２）。

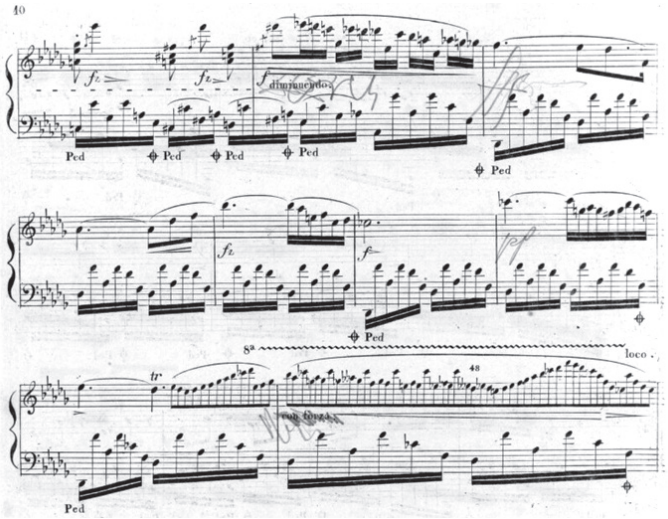
このコレクションの各巻には下記の作品がほぼ作品番号順に収められている（コビランスカの『フレデリック・ショパン：テーマ別書誌目録』とは一部が異なっている）[8]。

表１　各巻に収められた曲の作品番号

第１巻	作品１、２、３、6－1～５、7－1～４、８、９、10－1～12、25－1～12、11
第２巻	作品12、13、14、15－1～３、16、17－1～２、18、21、22、23、24－1～４、26－1～２、27－1～２、29、30－1～４、32－1～２、33－1～４、34－1～３
第３巻	作品38、39、40－1～２、41－1～４、42、43、エミール・ガイヤールのマズルカ、44、45、46、47、48－1～２、49、50－1～３、51、52、54、28－1～12、28－13～24

ピアノとオーケストラのための作品（作品１、11、13、14、21、22）はピアノ独奏用に編曲されたヴァージョンから成っている。また、室内楽作品（作品３と作品８）はピアノ用のパート譜しかない。《タランテラ》変イ長調作品43の楽譜は一部が欠けている。

譜例１　《夜想曲》変ニ長調作品27－2第44～62小節　イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜（以下（J）と記す）

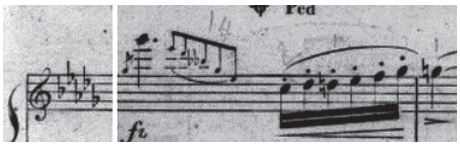


2. 1. ショパンによる書き込み

３つの先行研究でも指摘されていたように、この楽譜は当初はショパンの手元にあり、そこに彼が修正を加えていたものと考えられている。例えば、《夜想曲》変ニ長調作品27－2第45、46、50、60小節の強弱

記号の大幅な修正は曲の推敲とも言えるものであり、その内容からもこれらは明らかにショパンによる書き込みである（譜例１）。はしり書きの筆致は、彼の音楽的探求の姿を率直に示しているようである。また、同じ《夜想曲》の第８～９小節には、ショパンがピアノを弾きながら思いついた運指法を自分で分かる程度にメモをした痕があり、これもショパンの筆跡と考えられる（譜例２）。

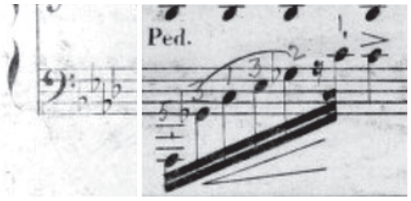
譜例２　《夜想曲》変ニ長調作品27－2第8～9小節(J)



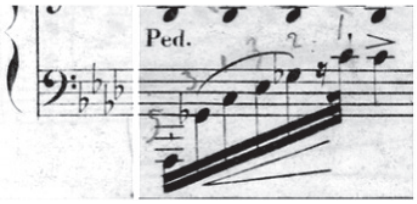
2. 2. 他者による運指法の書き込み

一方、しっかりと丁寧に書かれた書き込みはスターリングの楽譜への書き込みと同じ内容のものが多い。例えば、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の《夜想曲》ヘ長調作品15－1第８小節には、左手の広い音域に亘るアルペッジョに5－3－1－3－2－1の運指法が書き込まれているが、スターリングの楽譜の同じ箇所にも全く同じ内容の書き込みが見られる（譜例３a, b）。前者は丁寧に書き写したような筆致で書き込まれており、後者ははしり書きで書き込まれている。後者がショパンの筆跡であることは、これまでの研究で明らかになっている。

譜例３a　《夜想曲》ヘ長調作品15－1第28小節 (J)

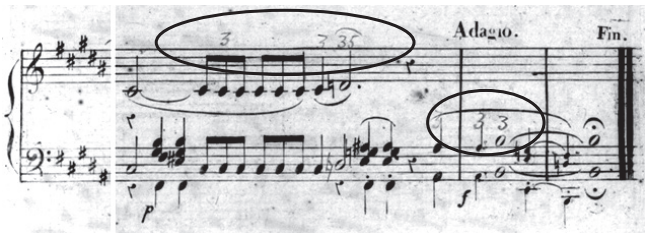


譜例３b　同　スターリングの楽譜（以下（S）と記す）

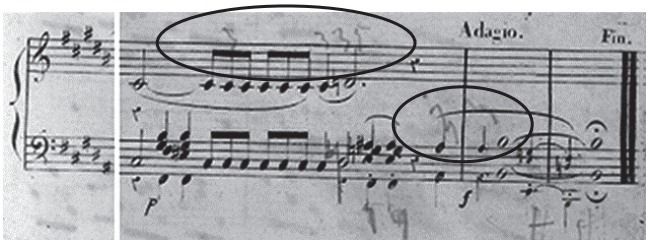


また、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の《夜想曲》ロ短調作品32－1第63～64小節には3－3－35－3－3の運指法が丁寧に書き込まれているが、スターリングの楽譜にはほぼ同じ運指法が左に傾いた筆致で書き込まれている（譜例４a, b）。それらには同じ指の連続使用（第63小節のC♯4-D4の進行）、および指の置き換え（同じ小節のD4）といったショパンの特徴的な運指法が見られるが（Mikuli 1880: Ⅲ）、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜では指の置き換えが$\widehat{35}$のように分かり易く記され、３の指の連続使用が第64小節のA♯3-H3にも書き込まれている。

譜例4a　《夜想曲》ロ短調作品32－1第63～65小節 (J)

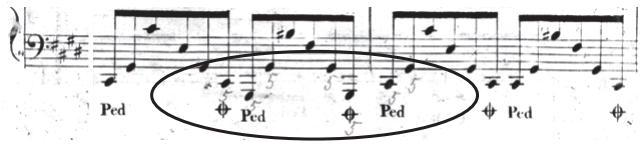


譜例4b　同 (S)

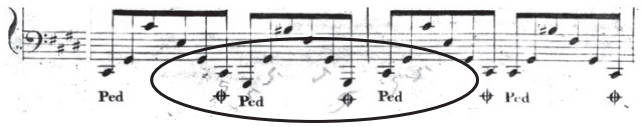


更に、《夜想曲》嬰ハ短調作品27－1第13～

譜例5a　《夜想曲》嬰ハ短調作品27－1第13～14小節 (J)



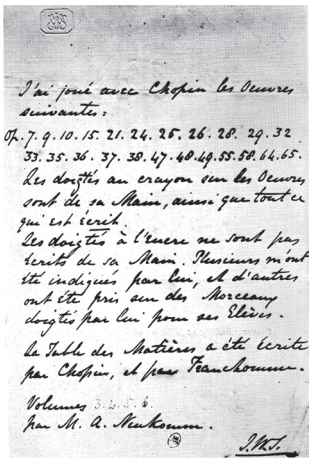
譜例5b　同 (S)



14小節にはイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜とスターリングの楽譜の両方に第５指の連続使用が書き込まれているが、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜にはそれが丁寧な筆致で書き込まれている（譜例５a, b）。前述したように、同じ指の連続使用はショパンの運指法の大きな特徴であった。

これらのことは、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜への書き込みがショパンの運指法の特徴を良く理解していた者によって行われていたことを示している。ショパンに崇拝の念まで抱いていたスターリングが彼の運指法の特徴を良く理解し、彼の書き込みを様々な方法で残そうとしていた可能性は充分に考えられるが、それらの書き込みの筆者をスターリングであると特定するためには彼女の筆跡を検討する必要がある。

写真３　スターリングの証書


J'ai joué avec Chopin les Oeuvres suivantes :
Op. 7. 9. 10. 15. 21. 24. 25. 26. 28. 29. 32. 33. 35. 36. 37. 39. 47. 48. 49. 55. 58. 64. 65.
Les doigtés au crayon sur les Oeuvres sont de sa Main, ainsi que tout ce qui est écrit.
Les doigtés à l'encre ne sont pas écrits de sa Main. Plusieurs m'ont été indiqués par lui, et d'autres ont été pris sur des Morceaux doigtés par lui pour ses Élèves.
La Table des Matières a été écrite par Chopin, et par Franchomme.
Volumes 3. 4. 5. 6.
par M. A. Streikomm.
J. St.

2. 3. スターリングの筆跡

スターリングはショパンの書き込みが行われた自分の楽譜を７巻本に纏めた際、「証書」を書いてその楽譜に挟んでいた（写真３）[9]。そこで、その証書に書かれた１～５の数字を基にスターリングの筆跡の特徴を検討する。

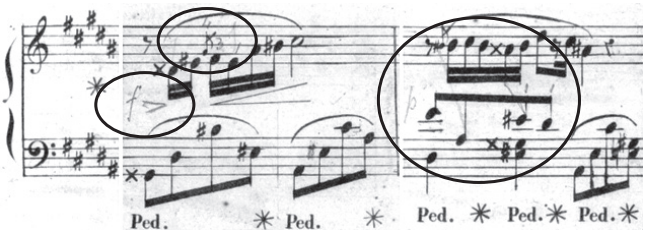
表１　スターリングの証書に書かれている１～５の数字の特徴

１：	1	1	1				
１の数字は特に大きな特徴は無い。							
２：	2	2	2	2	2	2	2
２の数字は右側への傾斜が少ない。							
３：	3	3	3	3	3	3	3
３の数字は 3 の部分が水平になる傾向にある。							
４：	4	4	4	4			
４の数字は横の線が縦の線を突き抜けていない。							
５：	5	5	5	5	5	5	5
５の数字は右側への傾斜が多い。							

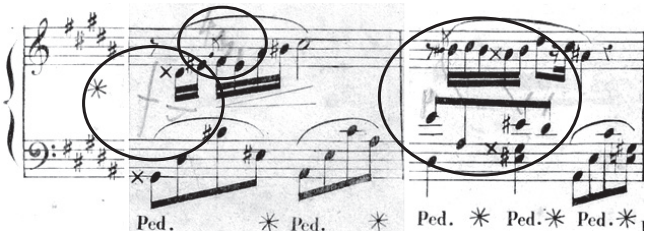
スターリングの証書に書かれた１～５の数字の特徴と、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に書き込まれた運指法の数字の特徴は非常に類似していることが分かる。例えば、譜例３a と譜例４a に書き込まれた「３」の数字の多くは上部がほぼ水平になっており、これは証書に書かれた「３」の数字の特徴と一致する。また、譜例３a、４a、５a に書き込まれた「５」の数字の形状や右傾度も、証書に書かれた「５」の数字と非常に類似している。こうしたことから、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に見られる運指法の書き込みはスターリングによるものである可能性が極めて高いことが分かる。一方、ショパンの数字の筆跡は弟子たちの楽譜への多くの書き込みから自ずと分かる。彼の「３」や「５」の数字は下半分の湾曲部分が縦に膨らむことが多く、これは譜

例３b、４b、５bにも共通して認められる。こうしたことから、ショパンがスターリングの楽譜に行った書き込みを、彼女がイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写していた可能性が極めて高いことが分かる。

譜例6a 《夜想曲》ロ長調作品32－1第27～28小節（J）



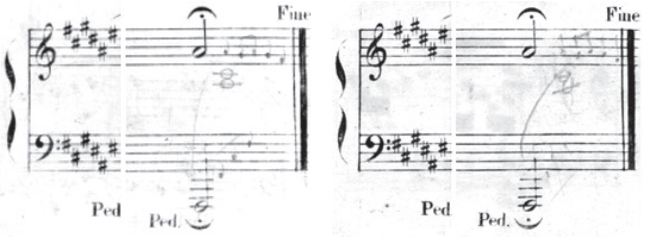
譜例6b　同（S）



2. 4. 他者によるそれ以外の書き込み

スターリングによるものと見られる転写には、運指法ばかりでなく様々な内容が含まれている。例えば、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の《夜想曲》ロ長調作品32－1第27小節のG♯4-F♯4-E♯4には4-3-1の運指法が、第28小節のE♯4-D♯4には左手の1-1の運指法がきっちりとした筆致で書き込まれており、これはこれまで見てきた運指法の転写の状況と同じである（譜例６a, b）。しかし、この箇所には同じ鉛筆でそれ以外の指示も転写されている。スターリングの楽譜のこの曲の第27小節と第28小節にはショパンがしばしば用いていたfとpをセットにした強弱記号が書き込まれており、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の同じ箇所にはその転写が丁寧な筆致で行われている。また、第28小節１～２拍目では、ショパンはスターリングの楽譜にルバートの表現方法を意図して左右の手で同時に弾く音を線で結んでいるが、これもイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写されている。しかし、ショパンがスターリングの楽譜の第27小節のD✠４にアゴーギクを意図して指示をした横に長いアクセントは、充分に理解されないままイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の同じ小節の左に寄せて記されていることも分かる。ショパンは通常のアクセントと横に長いアクセントを使い分けており、後者は音量よりも音色やアゴーギクに関連していたものと考えられている。

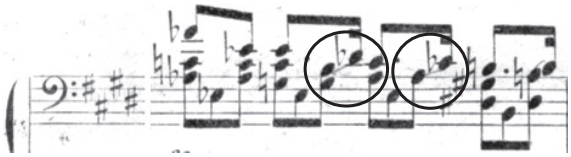
譜例7a 《夜想曲》嬰ヘ長調作品15－2の第63小節（J）　譜例7b　同（S）



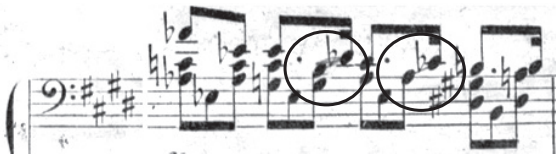
更に、ショパンはスターリングの楽譜　の《夜想曲》嬰ヘ長調作品15－2の第63小節（最終小節）に即興的な装飾を書き込んでいるが、これもイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写されている（譜例７a, b）。ショパンはこの装飾をスターリングの楽譜以外には残していないことから、これは貴重な資料となっている（Ekier 2019: 11）。

貴重な内容の転写としては、《前奏曲》ホ長調作品28－9の３連符と付点リズムの同時奏法の指示も挙げることができる。ショパンはスターリングの楽譜のこの曲の第８小節の２拍目と３拍目で、３連符の３番目の音と付点リズムの

譜例8a 《前奏曲》ホ長調作品28－9第8小節（J）

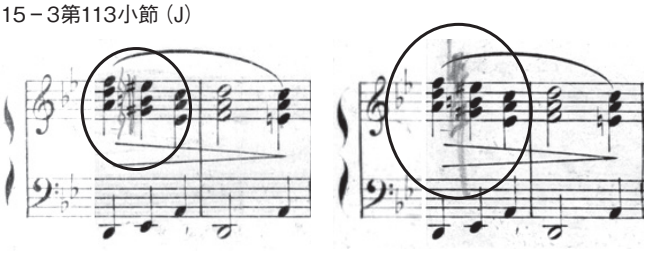


譜例8b　同（S）



16分音符を短い線で結んでおり、これらの音を同時に弾くことを指示しているが、この書き込みもイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写されている（譜例８a, b）。この曲の同時奏法については、これらの書き込みによって議論の余地は無くなるが、この指示は現在のところ、この二人の楽譜以外には見つかっていない。

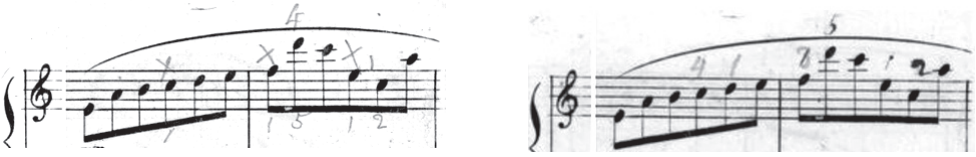
譜例9a 《夜想曲》ト短調作品15－3第113小節（J）　譜例9b　同（S）



更に、ショパンがスターリングの楽譜に行った誤植の修正も転記されている。《夜想曲》ト短調作品15－3第113小節にはそうした例があり、スターリングの楽譜に書き込まれた♮の激しい筆致には、誤植に対するショパンの怒りさえ感じられる（譜例９a, b）。

ショパンは運指法をイギリス方式で記すこともあった。イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の《ワルツ》イ短調作品34－2第81～82小節の音符の上にはショパンの筆跡でイギリス方式による運指法が書き込まれている（譜例10a）。しかし、ショパンはスターリングの楽譜には通常の方法で運指法を書き込んでおり（譜例10b）、それがイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の音符の下に転写されている。その際、ショパンがイギリス式運指法で＋を書き込んだ音符の下に「１」が記されており、第81小節のC5は正確な転写とは言えないが、転写をした者はショパンがイギリス方式で運指法を記していたことを知っていたことを示している。

譜例10a 《ワルツ》イ短調作品34－2第81～82小節（J）　譜例10b　同（S）



こうした転写はショパンの音楽を良く理解していないと行えないし、特に、《前奏曲》ホ長調作品28－9のような書き込みは、その意味が充分に理解されていなければ転写は正しく行われなかったであろう。こうしたことから、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜への書き込みは、スターリングが自分の楽譜に行われたショパンの書き込みを彼女の楽譜に転写したものと考えてほぼ間違いない。

３．転写の時期

それでは、これらの転写は何時、どのように行われたのであろうか？　前述したように、MC の書誌資料は不詳な者の手によるメモがイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に書き込まれたのは1849～1850［？］としており、エーゲルディンゲルもスターリングによる転写の時期をショパンが亡くなった1849年10月17日からイェンジェイエヴィチョーヴァがワルシャワへの帰途につく1850年１月２日までの間としている。もし、転写がイェンジェイエヴィチョーヴァが初めにパリを訪れた1844年以前に行われたとすると、前述のエーゲルディンゲルの考えに加え、スターリングはショパンからまだそれ程多くの書き込みを得ていなかったことが推察される。そうした状況を考えると、転写が行われたのは1849年10月17日から1850年１月２日までの時期であった可能性が最も高くなる。おそらく、ショパンが亡くなった後、彼が用いていた楽譜をイェンジェイエヴィチョーヴァがヴァンドーム広場のアパートから取り出して、スターリングが所有する楽譜と照合し、その楽譜に書き込まれていた注釈をスターリングがイェンジェイエヴィチョーヴァの（所有となった）楽譜に転写したのではないだろうか。この期間にそうした作業を行う時間は充分にあったはずである。そして、この楽譜コレクションをイェンジェイエヴィチョーヴァがどのようにワルシャワに持ち

帰ったかについては、関連する資料が僅かに残っている。MC の元館長であるハンナ・ヴルブレフスカ=ストラウス Hanna Wróblewska-Straus（1949～）の研究によると、スターリングはワルシャワのイェンジェイエヴィチョーヴァに宛てた1850年１月31日付けの手紙の中で下記のように書いている。

> 楽譜が入った小さなトランクの運命について、彼女［友人オブレスコフ夫人］は私を安心させてくれました。国境では厳正に検査が行われており、貴方［イェンジェイエヴィチョーヴァ］のように楽譜しかない場合は細心の注意を払って返してくれると彼女は言っています。（Wróblewska-Straus 1985: 70）

スターリングがこの手紙の中で述べている懸念は、ショパンの注釈が転記されたイェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜が無事にワルシャワに着いたかどうかであった。その楽譜が何時、どのような方法でワルシャワに着いたかについては明らかになっていない（ibid. 73）。しかし、スターリングはその楽譜をイェンジェイエヴィチョーヴァがワルシャワに持ち帰ったことを知っていて、この手紙でそれに触れていることが分かる。

結

イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜コレクションは、スターリングの楽譜コレクションおよびカミーユ・デュボワ=オメアラの楽譜コレクションと共にショパンの弟子の楽譜コレクションの中で最も重要なものの一つとされているが、本研究はこの楽譜の書き込みにスターリングが大きく関わっていたとするこれまでの仮説を様々な点で裏打ちするものとなった。イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜に転写された書き込みにはショパン特有の運指法、強弱記号、ルバートの表現方法、アゴーギク、装飾、３連符と付点リズムの同時奏法、誤植の訂正、イギリス方式の運指法等が含まれており、こうした転写はショパンのピアノ音楽を良く理解している者でなければ行うことはできない。この転写を本当にスターリングが行ったのであれば、それは彼女がショパンの協力を得て行った７巻本の作成、ショパンの最晩年に彼をイギリスへ招いたこと、ショパンの死後、彼が用いていたピアノや様々な自筆譜、スケッチ、書簡等を買い取ってワルシャワに送ったこと等の一連の脈絡の中で考えるべきであろう。尚、イェンジェイエヴィチョーヴァの楽譜の書き込みにはショパンとスターリングの他、テレフセンやイェンジェイエヴィチョーヴァ自身の筆跡も僅かに見られるが、これらについては別の紙面で検討することとする。

註

（１）スターリングはスコットランド貴族の末裔であり、ショパンのレッスンを受けるために1843年からパリに居住していた。彼女はパリに邸宅を持ち、美術も学んでいた他、慈善活動も行っていた。

（２）Kolekcja Muzeum Chopina. http://kolekcja.nifc.pl/M/174-176（Accesed: 19/9/2023）

（３）第３巻の書誌情報には最初の装丁に関する説明があり、「ルドヴィカ・イェンジェイエヴィチョーヴァ［？］の決定により、共通の装丁にまとめられた。それらは当初、茶色のハーフレザーで製本され、表紙の中央に ‘C.’ のイニシャルが型押しされ、塗金が施されていた。」と書かれている。

（４）第２巻の書誌情報にはメモの筆者としてショパン、スターリング、そして弟子のトーマス・テレフセン Thomas Tellefsen（1823～1874）の名前が挙げられ、更に不詳な者が加えられている。

（５）第２巻の書誌情報では「この資料は「作品全集」［通称パデレフスキ版］の執筆中（1940年代～1960年代）は、ルトヴィク・ブロナルスキがフライブルクで保管していた」と加えられている。

（６）この楽譜は書き込みの入ったショパンの生徒の楽譜としては量的にも質的にも最も重要なものである。後述するスターリングの証書にも記されているように、このインチピットの作成にはショパン自身や友人でチェリストのオーギュスト＝ジョゼフ・フランコム Auguste-Joseph Franchomme（1808～1884）、弟子のジギスムント・ノイコム

Sigismund Neukomm（1778～1858）等が協力していた（Eigeldinger 1982: XXI-XXIII）。

（7）しかし、この楽譜コレクションに作品55～65が含まれていないことをどのように考えれば良いかという問題は依然として残っている。

（8）例外として、《練習曲》作品25が第１巻の最後から２つ目に収められ、《24の前奏曲》作品28が第３巻の最後に収められている。

（9）この証書の内容は次のとおり。

ショパンの作品全集７巻本について：

私はショパンに次のような作品を習いました；

作品７、９、10、15、21、24、25、26、28、29、32、33、34、35、36、37、38、47、48、49、51、55、56、58、64、65。

作品への書きこみで鉛筆書きによる運指法は、全てショパンが書いたものです。

ペン書きの運指法は、先生が書いたものではありません。私が先生に言われて書いたり、他の弟子が教わった運指法を私が写したりしたものです。

目次はショパンとフランコムが書いたものです、M.A.［ジギスムント］ノイコムによる巻。〔　〕

J.W.S.

（エーゲルディンゲル 2020: 298）

参考文献

Eigeldinger, Jean-Jacques et Jean-Michel Nectoux (ed.). 1982. *Frédéric Chopin. Œuvres pour piano. Exemplaire de Jane W. Stirling avec annotations et corrections de l' auteur,* Paris: Bibliothèque Nationale.

Eigeldinger, Jean-Jacques. 2006. *Chopin vu par ses élèves, 3e éd, revue et augmentée*, Neuchâtel: La Baconnière.（邦訳：ジャン＝ジャック・エーゲルディンゲル．2020.『弟子から見たショパン：そのピアノ教育法と演奏美学 増補改訂版』米谷治郎・中島弘二訳、東京：音楽之友社）

Eigeldinger, Jean-Jacques. 2012. 'Regard nouveau sur les partitions annotées de la collection Camille Dubois-O' Meara' , in *Noter, annoter, éditer la musique,* Genève: Droz, 497-511.

Ekier, Jan. 2019. 'Komentarze źródlowe *(Skrócony)*' in *Fryderyk Chopin; Nocturnyn,* Kraków: PWM.

Kobylańska, Krystyna. 1979. *Frédéric Chopin: Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis,* München: G. Henle.

Mikuli, Carl. 1880. *Fr. Chopins Pianoforte-Werke,* Leipzig: Kistner.

Wróblewska-Straus, Hanna. 1985. 'Jane Wilhelmina Stirling' s Letters to Ludwika Jędrzejewicz' , in *Rocznik Chopinowski 1*, Cracow : PWM, 45-152.

加藤一郎．1996.「ジェーン・スターリングの教授用楽譜の書込みにみるショパンの音楽的意図（IV）―線状の書込による様々な表現上の指示―」『金沢大学教育学部紀要』第45巻、11-24。

楽譜

Eigeldinger, Jean-Jacques et Jean-Michel Nectoux (ed.). 1982. *Frédéric Chopin. Œuvres pour piano. Exemplaire de Jane W. Stirling avec annotations et corrections de l' auteur,* Paris: Bibliothèque Nationale de France.

Kolekcja Muzeum Chopina（M/174-176）

謝辞

本研究は JSPS 科研費（課題番号17K02288）の助成を受けたものです。